

クリスマスプレゼント

サンタさんに一夜限りの恋人をプレゼントされた。

イブはとても幸せな時間で、僕も彼女も笑みに満ちていた。

翌朝、陽光の眩しさに目を覚ますと、

彼女はどこにもいなかった。

手紙もなかった。

プレゼントは「彼女がいると幸せだよ」という無言のメッセージ。

依存症の夜

いろんなものに依存していた今までの自分。

断ち切ってみた。

寂しさが襲ってきた。

でも新たに見えてくるものもあった。

それは断ち切ったはずの依存。

世の中は依存症に覆われていたのだ。

新しく生まれる絆も依存だけど、いままでとは違うもの。

視線の先はひとつだけ

あの子、その子、この子、

たくさんの目々がくるりくるりと巡りまわる。

疲れた目をもとの位置に戻しても、

そこはもとの位置じゃなくなった。

そして、

本当に好きな子を探せなくなる。

一点を見ていた頃の自分を取りもどそう。

キラリと光るスピカを探して。

Photo

ふたりに撮った写真。

焼き増しして、僕の方、彼女の方が、世界に2枚ある。

僕の写真は色褪せてきたけど、

彼女の写真はどうなったんだろう？

もう捨てちゃった可能性が高いけど、

心の中にちょっとだけでも焼き付いていてほしいなど、

10年後に思ったよ。

蜃気楼

すぐそこにいたはずなのに、

ゆらゆらと消えてしまった。

僕が見ていたのは現実のものではなく、

僕の屈折した光が浮かび上がらせた蜃気楼だったのか？

飛行場で彼女が何度も振り返ったけど、

もう振り返らなかったときから、この揺らめきは消えない。

東京タワー

君と見上げた東京タワー。

いまはいちばん高くはなくなったけど、

あの頃の真赤なタワーのままだよ。

スカイツリーよりも、大切な思い出がつまっている、

僕の東京タワー。

Good Night

満天の星空に。

冬の夜空に。

かわいいチワワに。

いつか僕のとなりで眠っているだろう君に。

おやすみなさい。

電話

ひとり孤独を感じているときにかかってくる、一本の電話。

人とのつながりを感じる、温かい音がする。

携帯の着信音は、場にそぐわない機械的な音ではあるけれど、

心の波動に調和して、身体中が和み、癒される。

僕はやさしく通話ボタンを押す。

もしもし。

ハーモニカ

海辺にすわりながら吹くハーモニカ。

足下を打つ白波のように、

こだましてさすらう。

波、音楽、青。

海の向こうまで、この声を届けたい。

冬の太陽

雪になりきれない冷たい雨が降っている。

空は心の不安定さを嘲笑うかのように灰暗い。

人は傷つき、街は静まる。

でも明日は今日のままではない。

冬晴れの太陽が雨雲の陰から、こちらを覗いている。

空気のようなもの

あたりまえのように思ってたもの。

空気のようにあって当然だと思ってたもの。

なくしてはじめてわかる。

どんなに小さなことでも、

小さくないことでも、

助けられてるんだって、

いつも感謝しなければならないんだ。

パパ

きっと良いパパになれるって思ったんだ。

料理しているときのマジメな横顔、みんなが食べているときの嬉しそうな笑顔。

面倒見のよい彼は、みんなを幸せにしてくれる。

ただ帰るときの後姿には寂しさが見え隠れして、僕は心配なんだ。

お墓参りの夢

大学自体の友達で、好きでも何でもなかった。

でも、昨夜その子のお墓参りに行く夢を見た。

起きたときに泣いてたんだ。

この感情はなんだろう？

ただ思い出したのは、その子の笑顔は、とてもかわいかったなってこと。

福島のことろ

山々の光景が僕の心に迫ってきた。

むかしそこにあった空は、いまでも変わらない水色をしてるけど、

汚染された空になったんだ。

土も水も、むかしのままなのに、

すべて変わってしまったんだ。

ただ人のやさしさだけは、

変わらないままだり続けていた。

無敵のおじいちゃん

無敵のおじいちゃんだった。

90を前にして幼くなってしまった。

心配性になり、おぼつかない歩き方になり、意味不明に怒鳴るようになった。

でも、入院してるおばあちゃんに会いたいと涙を流したおじいちゃん。

はじめて見るおじいちゃんの涙がすべてを語っていた。

上京、帰京

この街が僕にくれたもの。

魅力のなさ、つまらなさ、上京への夢。

そしていま、この街が僕にくれようとしているもの。

郷愁、家族への愛、帰郷への夢。

歳を重ねるうちに変わっていく心情と感性。

僕は死にゆく街並を見つめながら、東京行の新幹線乗場に向かった。

太陽はまわる

ほら、やっぱり晴れた。

たとえ寒かったり、雨がふったりする日があっても、

太陽は僕たちを見捨てたりはしないんだ。

ひとりひとりを温かさで包み込みながら、

太陽はやさしく地球をまわってるんだよ。

鍋

鍋はみんなで食べると美味しい。

和気あいあいとした団欒が生まれる。

そう、それって、まるで鍋の中の食材のようだ。

それぞれが互いに味を分け与え、不足点を補い合い、

100点を200点にしてしまう。

だから、僕たちはもっと、鍋をつつき合う必要があるんだ。

なう

恋をすると女の子は綺麗になる。

オーラ。輝き。きらめき。

恋のために、何かを捨て、何かを得る。

自分のしがらみだった何かを開放したんだ。

一方、僕は何に囚われているのだろう？

過去？ もっと過去？

そんなもん、捨ててしまえ。

いまを開放せよ！